

番組審議会

■開催日時

2020年9月17日

■開催場所

オンラインにて実施

■出席委員

関沢英彦委員長、野田慶人委員、天城鞆彦委員、瀬戸純一委員、中浩正委員、米村恵子委員

■審議対象番組

「ヒューマンエナジー」

「ダミアン・ルイスの『スパイ大作戦』」

■ご意見

「ヒューマンエナジー」について

・NHKの『逆転人生』に負けない上出来の作品。

ヒューマンエナジーのような自社作品を増やしたほうがいいと思う。予算との兼ね合いもあるだろうが、挑戦して欲しい。あるジャンルの進歩、退歩、変化の歴史をたどる、など。

・輸入品、便利グッズ、安価な商品の登場に押され縮小気味の日本の匠の技。

そこに注目し、常識を覆し、更に進化させ逆輸入とばかりに外国で日本を再認識させた変態集団？？

「FANOUT」代表石田卓也を紹介する番組（作品）。

無理難題を可能にし、最高の道具を作ろうとする姿勢が日本の多くの匠の多く住む燕三条の職人たちまで本気にさせた。その完成品はまさに日本の匠の技が進化した最高の道具！紹介されていないので値段は気になるが世界中で評価の高まるのは当然！！

オープニングは余計な説明はせず直接使用されているシーンを見ることからの方が劇的かとは思われるが、テクニック面でも進化し、テーマは言う事なく、ヒストリーチャンネルにふさわしい作品と高く評価したい。

ただ、時間的に90分は長いので、日本人だったアメリカ人石田卓也の「自分よりも人を想う」ことの実践ボランティア活動における石田卓也は別編で紹介しても、、、

・日本へのモノへのこだわりをアメリカのヒトを助ける志向、この2つをあわせもつ石田卓也さんの姿が素敵にまとめられている。モノづくりの改革、大学の改革、ともに成功されたエネルギーに敬服。

・主人公及び登場人物の表情がみな生き生きと魅力的。「元気をもらえる」番組で気持ちよく見られた。が、1時間半はやはり長い。しかも贅沢なことに珠玉の素材エピソードがあり過ぎて、やや咀嚼不足の感。いい話過ぎる社会貢献が締めくくりに紹介されたことで、前半 50 分使った日本の匠の印象が薄まってしまったほどだ。タイトルは、番組に登場した沢山の名言（常識を裏切る独創性・人はなぜこだわるのか・自分の成功より人の幸せ・やりたくないことをやるから競争しないで生きていける等）からキャッチフレーズを一つ選び現状の「ブランド名&個人名」の前につけるのもよかったかもしれない。

・刃物作りの真面目な匠の物語かと思ったら、日本とアメリカを股にかけたスケールの大きな人物の痛快な物語だった。アメリカで学んだ人に奉仕する生き方を日本で幅広く実践している点に心をひかれた。撮影対象者たちが交わす言葉に丁寧に耳を傾け丹念に録画している点に好感を抱いた。番組成功の最大のポイントだと思う。

「ダミアン・ルイスの『スパイ大作戦』について

・事実の歪みは確かになるが、平凡なスパイ映画の域を出ない。上出来のスパイ小説（映画）に及ばないのは、ゴルディ越スキーのスパイに転向する心理や苦悩がよく描かれていないからだ。この手の実録物は、「事実は小説よりも奇なり」を地でいく内容でないと難しいだろう。

・KGB のスパイでありながら MI 6 の二重スパイとなり、結果的に冷戦時代の核戦争（第三次世界大戦）危機を救った李、冷戦を終わらせることに貢献し、エリザベス女王から勲章を授かったスパイ「ゴルディエンスキー」にスポットを当てた意欲作。

ドキュメンタリードラマと言うよりも、ソ連、イギリス、米国の元政府関係者や MI 6、KGB, CIA 関係者、さらに大学教授等のインタビューで構成されたドキュメンタリー的作品。

ソ連脱出時のトランク検査無し等、不可思議な点は疑問も、ヒストリーチャンネルにふさわしい興味深い作品に仕上がっている。

・歴史の背後にはスパイがいる。矛盾の中を生きるスパイ。特に二重スパイの苦悩はドラマになる。よくできた作品。マークス&スペンサーの袋→チョコレートバーを食べる男でのコンタクトなどディテールが楽しい。

・ゴルディエフスキーが、二重スパイとして重要な情報を 10 年にわたって提供していた、というストーリーは、興味深く、面白く見た。二重 CIA 職員もまた KGB のモグラだったというのも激的な「スパイの戦い」を物語るものだ。ただ、「第三次世界大戦を回避させたスパイ」というのは、いささか

羊頭狗肉はないか。自国(自分)第一主義しか念頭にないような危うい指導者たちをいただく現代もまた、十分に恐ろしいことを改めて想起させられた。

・「事実は小説より奇なり」まさにそのまま映画のような内容で、スーパーのレジ袋やチョコバー等周辺エピソードも出来すぎ。本作には映像的面白さはないが、ストーリーだけで十分楽しめ、シリーズ第一回にふさわしい。サブタイトルも魅力的。有名俳優のナビゲーターは活かされているとは言えずもったいない。前半、危険な諜報活動に入って4年も実行できた動機や原動力がいまひとつ伝わらずモヤモヤしたが、終盤の「虚栄心」等人間の複雑さの提示で逆に腑に落ちる。締めくくりのナレーションも秀逸。イギリスの律義さ？が印象に残り、大物政治家の存在感が今や懐かしい。

・迫りに満ちた実話を見事に映像作品化している。

ドラマ化作品には珍しく本人の貴重なインタビューが活かされていた。合わせて関係者のインタビューが巧みに組み合わされいた点も評価する。チャールズ・パウエルの肩書きは外務秘書官より首相秘書官の方が適切ではないか。サッチャー首相の外交顧問・補佐官のような役割だったから。